

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：82705

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K20255

研究課題名（和文）盲ろう児に対するコミュニケーション指導アプローチの検討

研究課題名（英文）A Review of Communication Guidance Approaches for Children with Deafblindness

研究代表者

河原 麻子（Kawahara, Asako）

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所・西日本ランチ広島オフィス・研究員

研究者番号：50908481

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：わが国の盲ろう児担当教員のコミュニケーションに関する指導の困難克服に向けたプロセスを明らかにするために、教員3名に行ったインタビュー調査では、教員3名が、これまでの指導経験や、その他の教員や多職種の専門家との連携等を通して困難を軽減し、指導を行っていたことが明らかになった。欧米を中心に議論されてきたアプローチ（Child-guided strategies；CGS）の理論構築を取り巻く情報収集では、CGSの理論構築の背景やその他van Dijk氏のアプローチ等の情報、その他アプローチとの関連、現在のCGSの実践者の研修の実際等について情報を整理した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の主な意義は、複雑で独特の困難さを抱え、かつ希少障害とも呼ばれる「盲ろう」の子供の指導者の語りから、盲ろう児のコミュニケーションに関する指導の実際を把握できたこと、国外で議論されてきたアプローチの背景に注目することで、国際的な知見を踏まえた示唆を得られたことである。

研究成果の概要（英文）：I conducted interview surveys with three teachers in order to reveal the process of overcoming difficulties in communication guidance for teachers of children with deafblindness in Japan. The results revealed that the three teachers had reduced difficulties and provided guidance through their previous teaching experiences, collaboration with other teachers, multidisciplinary professionals, and so on. In the process of gathering information surrounding the theoretical construction of approaches (Child-guided strategies; CGS), I organized information on the background of the theoretical construction of CGS, other approaches by van Dijk et al., and the relationship to other approaches, as well as the actual training of current CGS practitioners.

研究分野：特別支援教育

キーワード：盲ろう 盲ろう教育 重複障害教育 複線経路・等至性モデリング TEM

1. 研究開始当初の背景

視覚と聴覚の双方に障害がある学校段階の子どもは「盲ろう児」と呼ばれている。視覚および聴覚からの情報が制限される彼らは、自然にコミュニケーション方法を獲得することが難しい場合が多く、彼らの教育には専門性の高い指導が不可欠である。一方、盲ろう児を担当する教員は、多くが初めて盲ろう教育に関わる者であることや、所属校で盲ろう児指導のための知識や技術が蓄積されていないこと等から、コミュニケーションに関する指導において多大な困難を感じていることが推察される。しかし、彼らを支援する情報提供や研修の機会は十分とは言えない現状である。

他方、盲ろう教育に先進的に取り組んでいる欧米諸国では、コミュニケーション指導のための解説書等が散見される。中でも、van Dijk 氏の考案した Child-Guided Strategies(以下、CGS)は、様々な文献の中で議論されてきたことが窺える。しかし、わが国においては、CGSの詳細は国外の文献等でしか知り得ることができない状況である。

以上を踏まえて、本研究では、わが国の教員らのコミュニケーションに関する指導の実情を明らかにし、その上で、CGS構築の過程で大切にされてきたことを整理することで、わが国で盲ろう児を担当する教員が抱える困難さや悩みを軽減するための示唆が得られるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、盲ろう児担当教員が、コミュニケーションに関する指導を行うにあたって感じる困難さを明らかにし、国外のアプローチを元に、国内における研修の充実を図るための示唆を得ることである。そのために、わが国の盲ろう児担当教員のコミュニケーションに関する指導の困難克服に向けたプロセスを明らかにすること(研究1)、CGSの理論構築を取り巻く情報収集を行うこと(研究2)を目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究1：盲ろう児担当教員の困難克服のプロセスに関する研究

盲ろう児の担当教員が、コミュニケーションに関する指導において、どのような困難に直面し、克服しているのかを明らかにするために、盲ろう児に対して、コミュニケーションに関する自立活動の指導を行っている教員3名(教員A、B、Cとする。経歴の概要を表1に示す)にインタビュー調査を実施した。得られたデータは、複線経路・等至性モデリング(Trajectory Equifinality Model: 以下、TEMとする)(サトウ・安田・木戸・高田・ヴァルシナー, 2006)を用いて分析し、3名の教員の辿ったプロセスをTEM図に示した。

表1 インタビュー対象者の概要

インタビュー当時の対象者の経歴(インタビューは年度末に実施)	
A	中学校で6年間、高等学校で27年間、特別支援学校(聴覚障害)で6年間勤務。特別支援学校(聴覚障害)にて、高等部の盲ろう生徒の指導を3年間行った。
B	特別支援学校(知的障害)で13年間、小学校で5年間、特別支援学校(聴覚障害)で12年間勤務。特別支援学校(聴覚障害)の乳幼児教育相談にて盲ろう児の指導を約4年間行った。
C	特別支援学校(肢体不自由)で約13年、特別支援学校(知的障害)で約10年、特別支援学校(聴覚障害)で3年勤務。Bと同校にて、同児の指導を2年間行った。

(2) 研究2：CGSに関する文献調査

これまで欧米諸国を中心に議論されてきたアプローチ確立の経緯や背景から、盲ろう児のコミュニケーション指導で大切にされてきたことを整理するために、アプローチの1つ(Child-Guided Strategies)に注目し、文献調査及び実際にCGSを使用している専門家を対象に聞き取りをし、情報収集をした。

4. 研究成果

研究1では、盲ろう児を担当した教員3名が、コミュニケーションに関する指導において困難を感じながら、これまでの指導経験や、その他の教員や多職種の専門家との連携等を通して困難を軽減し、指導を行っていたことが明らかになった。以下では、インタビュー調査の結果のうち、各対象者がコミュニケーションに関する指導において感じた困難と、その克服のプロセスの一部を示す。

A の困難克服のプロセス（学会発表済み）

A は、盲ろう児担当開始前には、盲ろう児とどのようにコミュニケーションをとればよいか不安に感じるという困難に直面していた。まずは、聴覚障害のある生徒に行ってきた指導を当てはめ、「正面を向いて口を大きく開けて、口形を良く見せて話して、手話をつけて伝える」という方法を繰り返した。伝わると「安堵」したものの、「1つのことを進めるのにこれだけ力を使わなきゃいけないのか」というさらなる困難に直面した。盲ろう児が高等部3年生の時に、新担当のSTが示した指文字を、生徒が触って読みとっている様子を見て、触手話を導入してみたところ「意思疎通が全部いくようになって」「今までのコミュニケーションに対する労力がガクンと下がった。困難克服に向けて後押しとなったこととして（TEMにおける社会的ガイド；SG）、STの介入、触手話についての知識、これまでの方法の大変さ、通じ合える喜び等があった。

B の困難克服のプロセス（学会発表準備中）

B は、盲ろう児とのかかわりの中で、盲ろう児が興味のあることをなかなか共有できないという困難に直面していた。まずは、盲ろう児の表出を読みとり、表出をまねたり、盲ろう児が楽しいと思うことを一緒にやってみたりすることを繰り返し、盲ろう児に認識してもらう機会を増やした。そこから徐々に、盲ろう児が興味のある時に示す表出を読みとるようになった。SGとして、過去の指導経験や、自身を認識してくれる喜び等があった。反対に、困難克服から遠ざける力（TEMにおける社会的方向付け；SD）として、主にBと盲ろう児の二者間でのやりとりを早く汎化させなければならないというプレッシャー等があった。

C の困難克服のプロセス（学会発表準備中）

C は、盲ろう児の興味・関心の模索という困難に直面していた。これまでの指導経験から、盲ろう児が興味のある教材を選び提示するも、盲ろう児がその場から去ることが多々あった。待つことを大切にしながら、盲ろう児の視線等わずかな表出や行動を読みとることで、盲ろう児の興味を探っていた。SDとして、複数のかかわり手での話し合い、盲ろう児の模倣行動に対する喜び、過去の指導経験、校内資源の充実、盲ろう児の行動から感じる指導の面白さ、SGとして、聴力の把握が難しいこと等があった。

研究2では、CGSの理論構築の背景やその他 van Dijk 氏のアプローチ等の情報、Co-Creative Communication（CCC；共創コミュニケーション）との関連、現在のCGSの実践者の研修の実際等について情報を整理した。

van Dijk 氏のアプローチから、van Dijk 氏は、盲ろうが視力・聴力が異なる異質なグループであることを十分に考慮した上で統合アプローチを構築してきたこと、またそれらは、Welner and Kaplan（1963）の象徴理論（van Dijk, 1967）や聴覚障害児の言語発達に関する Uder（1977）の概念（van Dijk, 1967, 1983）、愛着と社会性の発達の概念（Bowlby, 1973; Ainsworth, Bell, and Stayton, 1974）等に基づいていて説明されてきたことが整理された。

CGSは、“Child-Guided”と示される通り、子供のリードに従い、子供の行動に共鳴（resonance）することを大切にしている。CGSの8つの領域には、コミュニケーションや社会的なかわりも含まれ、重複障害特有の言語発達の道筋を踏まえた評価が行われている。CGSは、トレーニングを受けた教員、親、専門家等が実施することができる。本研究では、CGS実践者の研究協力者が教員研修プログラムで行った2名の重複障害児を対象としたセッションの動画を入手し聞き取りを行ったが、そこでは、子供が主導となり部屋を探索し、かかわり手が子供の様子を読みとりながらかかわる様子等が見られた。そのかかわりは我が国での実践と類似している部分が多々あるが、かかわり手の盲ろうや、盲ろう児の発達に関する知識量の多さが窺えた。

他方、本研究を通して、CGSが普及する中で、CGSに関する課題が指摘されてきたことも整理された。CGSが普及した後、別の盲ろうに関するアプローチ（CCC等）の提案もあり（土谷, 2011）、盲ろうに関するアプローチは欧米を中心に広く議論されてきたことが窺えた。

研究1において、盲ろう児の指導にあたった3名の教員が、これまでの経験を元に盲ろう児のコミュニケーションに関する指導の困難軽減に努めていたが、盲ろうに特化した情報提供や研修の機会が生かされた経験は限られていた。今後、盲ろう児担当教員が直面する困難軽減のプロセスについてさらに蓄積することに加え、盲ろう特有の発達の過程等を踏まえたかかわりについても国内外から情報収集し、国内の実情に合った方法で提供するための準備をすることが必要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 河原麻子・林田真志
2. 発表標題 盲ろう児担当教員の困難克服のプロセス コミュニケーションに関する自立活動の指導にあたる教員1名へのインタビュー調査から
3. 学会等名 日本特殊教育学会第61回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------